

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 7 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720181

研究課題名(和文) マラルメと象徴主義を中心とする無意識の詩学の生成とその展開

研究課題名(英文) Poetic of unconscious in Mallarme and symbolism : its birth and development

研究代表者

熊谷 謙介 (Kumagai, Kensuke)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20583438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：無意識という観点から、マラルメと広義の象徴主義に属する作家の作品群について分析した。他者と共有された魂としての無意識は、「家族」や「儀礼」、「生=性」、「自然」と関連する概念であることが明らかになった。研究の結果得られたのは、マラルメによって「自己」と名指された無意識の概念の、通時的側面である。魂の交流は結婚の比喻で語られるが、『アナトールの墓』の読解によって、これが必ずしも男性と女性の結婚に限らないことが分かった。それは、子孫との相続、遺伝関係も含意しているのであり、世代を超えて伝えられていく遺伝形質こそ、マラルメの文学の核であり、後世の人々との関係性を示す概念となることを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the question of “unconscious” in the works of Mallarme and other writers associated with the “symbolism” in a broad sense. The unconscious as a spirit shared by others is related to the “family”, “ceremony”, “life-sex” and “nature”. Mallarme called this concept “Soi (Self)”, and we discovered its diachronic aspect behind its trans-racial universality in the humanity. In Mallarme’s unachieved poem, Tomb for Anatole, the story of communion is depicted with the metaphors of marriage, but the father marries his dead son, by means of a mutual exchange of “Self”, “germ” as a seed of species. This heredity from generation to generation shows Mallarme’s aim of making the supreme work called “Book”, and the relationship with the future generations.

研究分野：フランス文学・表象文化論

 キーワード：世紀末 他者 哲学 国際情報交換・フランス、ベルギー 国際情報交流：フランス、ベルギー 社会
 思想 精神分析 美学

1. 研究開始当初の背景

世紀末における無意識の研究は、精神医学の前史研究(アンリ・エレンベルガー『無意識の発見』)や、思想史や美術史(アール・ヌーヴォー、世紀末美術研究)また群集心理学(ルボン、タルドや犯罪心理学研究)といった分野でしか見られなかった。文学研究においては小説分析(モーパッサン、ゾラなど)において論じられることはあったが、現代の精神分析の観点から作品・作家を診断するという観点が支配的であり、また詩はほとんど取り上げられないのが現状であった。

研究代表者は主としてマラルメ研究の観点から、フランス 19 世紀末の文献資料の読解を進めてきた。また、このような時代研究と交差するような形で、近・現代における祝祭・スペクタクルと共同体の関係について歴史的分析を行ってきた。その過程で浮かび上がってきたのが、祝祭という場で神秘との接近を求める、群衆の中に潜む衝動であり、世紀末において「無意識」と呼ばれ始めるものの重要性である。それは個人の奥底に眠るフロイトの「無意識」とは異なり、集団の魂と言える点で、共同体の問題に直結するものであった。

マラルメ研究において「無意識」という観点は必ずしも新しいものではない。現代のマラルメ研究の第一人者ベルトラン・マルシャルの主著『マラルメの宗教』(1988)では、神話学が詩人に与えた影響から、マラルメが「自我 Moi」と区別して用いた「自己 Soi」という概念の分析がなされている。また日本においては竹内信夫が「神性」という言葉の分析から、キリスト教的「神」とは異なる集団的魂の重要性を示した(1978)。両者が提示した展望は大きく、ここ十年でもこの問題を扱う学会発表が数多くあった。

マラルメの「自己」という概念に関して、2008 年に研究代表者は新たな視点を提示する発表を行った。長らく活字にならなかったアンリ・ド・レニエの日記に、「自我」と「自己」という語が何度も記されていることを指摘し、「自己」という概念がマラルメだけでなく、1890 年代初頭の前衛で広く叫ばれていたことを示した。またラフォルクとパレスという象徴主義の周縁にいる文学者の作品の分析によって、世紀末におけるドイツの思想家ハルトマンの無意識の哲学の重要性を明らかにした。さらに文学者ばかりでなく画家ルドンも取り上げることで、人間の起源を探る同時代の生物学も、無意識の思想の誕生に深いかわりがあることを示すことができた。

本研究はこうした予備考察を踏まえ、マラルメが 1860-70 年代にすでに生み出していた無意識の詩学が世紀末文壇にどのような影響を及ぼしたかを実証するのを狙いとする。そして詩作においてそれが家族や儀礼という、今まで看過されてきた主題に関連づけら

れるのではないかと、という仮説を示す研究である。この研究が象徴主義の再評価につながり、非決定性やトラウマ的記憶に特徴づけられる現代文学の分析に新たな視点を与えることを目指している。

2. 研究の目的

マラルメにおける「無意識」の概念の解明を出発点にして、本研究では、世紀末文学において無意識がどのような形をとって作品として結実するかを中心に論じる。

このような無意識の詩学をつかさどる観点としては以下のようなものが挙げられる。

- ・家族(親子間の遺伝的継承の問題や、性的交流の問題)
- ・儀礼(結婚や葬礼などによる他者との魂の共有)
- ・自然(象徴主義の風土にある「人工=純粹意識=自我」では満たされない、内なる野生の希求)

本研究の実現により文学研究、19 世紀研究に寄与することを目指しているのは、以下の二つである。

(1) マラルメの詩作品の新たな主題の提示

家族や儀礼、自然というテーマは、モダニズム的解釈を受けがちなマラルメやヴァレリー、象徴主義詩人の作品にあって長らく見過ごされてきたものであった。例えばマラルメのサロメ詩群や、若きヴァレリー、ジイドのナルシスの主題は、純粹意識の追及として解釈されることが多かったが、その裏面にある、マラルメの牧神詩に見られるような、欲望や官能、暴力といったテーマも見逃すことはできないだろう。また『賽の一振り』も、必然を求め挫折する物語としてではなく、父子間の使命の継承や、男性的世界と女性(セイレーン)的世界の対比で構成される物語として読み解く可能性が秘められている。

(2) 「無意識」の観点による「象徴主義」像の刷新

今まで、象徴主義における神話や宗教の重要性についてはしばしば指摘されてきたが、「無意識」、それも個人ではなく集団の内に眠る無意識と象徴主義の関連を論じた研究は少なかった。それは「生」や「本能」という言葉が、観念の世界に閉じこもる象徴主義と対立するものと考えられていたからであったが、実際には、同時代の社会において姿を現しつつあった群衆の魂、人間の奥底にある魂を作品の中に表現し、語っていた最初の芸術運動こそ象徴主義であったことを示す。

3. 研究の方法

本研究は、これまで研究者が行ってきた、

マラルメの散文作品を雑誌掲載時のヴァージョンに立ち戻って読み直す手法や、19世紀末の雑誌・新聞記事をフィールドとする言説分析を、新たな対象に適用する試みである。

(1)本研究の研究対象として、マラルメの詩だけでなく散文や、メモの形で残っている未完の作品も積極的に扱う。またマラルメ以外にも世紀末の詩人・文学者(ヴァレリー、ジイド、ナチュリスムの文学者たち、メーテルランクなど)、さらにはオディロン・ルドンなどの芸術家の作品・言説も考察の対象とする。コーパスを大きく広げつつも、「無意識」という観点を中心に分析対象を取捨選択することで、研究期間内に調査を一区切りさせることができるようにした。

(2)また、研究の出発点として、「自我 Moi」と「自己 Soi」の対概念の展開を、文学作品だけでなく、当時の文学・思想誌に探ることから始める。そのために、フランス国立図書館のデジタル資料や東京大学図書館所蔵資料からデータを取ることを目指した。フロイト以前の「無意識」の核心となる「自己 Soi」の概念がどれぐらいの規模で文壇・論壇に流通していたのかを、同時代の雑誌の検索によって明らかにすることを狙いとするものだが、このような文献学的研究は、莫大な労力と、結果が出るかどうか分からないというリスクを背負う研究であった。しかし、フランス国立図書館の電子資料が充実したこと、「自己」を取り巻く概念体系(無意識、生、本能、衝動、自然...)をすでに確立していること、博士論文執筆の準備においてすでに一部のコーパス研究を経験していることから、研究期間内に完了できる見込みであった。

(3)文学作品を分析するにあたっては、以下の2つの観点を中心に論じる。

家族論的読解：これまで「技巧の詩人」マラルメの詩は、言葉が意味する指示対象と関係づけられて論じられることが避けられてきた。しかし、『賽の一振り』は未完の作品『アナートルの墓』に続く父子の物語であり、『エロディヤードの結婚』もまたヨハネからサロメへの聖性の継承の物語として考えると、マラルメの実際のライフ・ストーリーとの関連を考える必要があるように思う。そしてこの観点は、同様に純粹詩の文学者として扱われがちなヴァレリーや象徴主義詩人の作品分析においても重要であろう。

儀式論的読解：これまで研究代表者は、著書『マラルメによる祝祭』に至る研究において、「密室の詩人」マラルメが「祝祭」について深い考察を残していたことを論じてきた。本研究では、それを社会的・歴史的側面だけでなく、人類学的側面を強調しながら、作品分析に適用する。結婚や葬儀、通過儀礼などのモチーフを、どのように作品に織り込

み、近代的視点によってそれを変形させているかを追っていく。

4. 研究成果

研究成果として、各年度の成果を示した後に、4年間の研究で解明されたことを要約することにしたい。

2011年度

研究初年度となる2011年度には、研究の見取図を示す論文『ルドン、ラフォルク、マラルメ—無意識の美学』[雑誌論文7]を発表し、象徴主義文学・芸術を代表する三者を生物学や心理学という新奇な観点から論じた。また、世紀末芸術の特権的形象とも言うべきサロメを、ジェンダーやダンサーの身体性の観点から分析することで、女性が無意識とどのように結びつけられてきたか、そして女性芸術家がそれをどのように自らの美学としたかについて考察した(『踊る女の両義性—ロイ・フラール『サロメ』を中心に』(『悪女と良女の身体表象』所収)[図書2])。そして、モダニズムの父とされるマラルメとセザンヌを、自然の観点から分析することで、技巧の限りを尽くす抽象芸術とみられがちな両者の作品が、実は自然や無意識を背景に成り立っていたことを示した(『自然が与えるモデルニテ—セザンヌとマラルメ』[雑誌論文6];『エチュード、自然、静物—セザンヌとマラルメ』[学会発表2])。

「マラルメの無意識の詩学の解明、そして象徴主義文学者・芸術家によるその展開」を捉えるという本研究全体の目的から見て、2011年度は文学に隣接する芸術分野の考察が中心であった。しかし、文学固有の無意識の問題についても、フランスへの出張により現地で収集された貴重な資料の読解を進めることができた。

2012年度

2012年度の主要な研究としては、数年来主要な研究対象としてきたマラルメの最晩年の作品『賽の一振り』を、父子と女性という家族論的観点から論じたものが挙げられる(『偶然と女—マラルメ『賽の一振り』分析』[雑誌論文4])。この論文は、2011年に発表され大きな反響を呼んでいるマラルメ研究である、カンタン・メイヤス『数とセイレーン—マラルメ『賽の一振り』の解読』に対して、日本で初めての応答を試みたものである。またそれに付随して、現代音楽の代表者であるジョン・ケージとマラルメの比較にも取り組み、世紀末芸術の現代芸術への遺産という点を示すことができた(『マラルメの星座、ケージの星群』[雑誌論文5])。また、マラルメから多大な影響を受けた文学者・思想家ブランショのイメージの問題を扱った著作『文学のミニマル・イメージ』について、マラルメ研究者という立場から書評を執筆

した(「イメージ」から「イメージ」へ - 郷原佳以『文学のミニマル・イメージ - モーリス・ブランショ論』書評)。

2012年度は19世紀末とは異なる時代の文学者・芸術家との比較が中心であった。しかし、世紀末固有の問題についても資料の読解の準備を進めており、2012年3月にフランス・ベルギーに出張し、現地での取材・資料収集を行った。メーテルランクだけでなく、ベルギー象徴派と呼ばれるヴェラーレンやローデンバックの分析を進めることで、フランス象徴主義とは異なる布置を示すベルギー象徴主義の重要性が明らかになった。社会改良運動との直接的な関係や、フラマン語圏の神秘主義の影響を確認することで、そうした観点をフランス象徴主義に適用した場合に何が見えてくるか、考察を続けていくことにした。

2013年度

2013年度の主たる研究としては、象徴主義やデカダンス文学の徒花としてあまり光を当てられてこなかった女性文学者ラシルドの作品を、同時代のジェンダーの言説との比較から読み解いたことが挙げられる(「BL小説の起源? —ラシルド『自然を外れた者たち』分析」[雑誌論文2])。この論文では、英米圏で評価の進むラシルドを日本に紹介し、これからのラシルド研究の土台を作ることを目指した。そして「自然/人工」「女性/男性」という対立がいかにかんじられた形で作品を貫いているかを示すことで、無意識の表象の複雑さを示そうと試みた。

また表象文化論学会において、「声」という観点からマラルメの祝祭を論じ、古代ギリシャから中世、現代演劇への道筋のなかで、その歴史的意義を探る発表を行った(「舞台上演と典礼の間で—マラルメによる「声」の祝祭」[学会発表1])。また、フランス語フランス文学会書評誌『カイエ Cahier』にマラルメ研究の書評を掲載した(「佐々木滋子『祝祭としての文学—マラルメと第三共和政』書評」)。

無意識のテーマは、現代の思想においてしばしば取り上げられる動物性のテーマに関連するものである。「ダンシング・ベア、シャイニング・ベア—熊としての芸術家の肖像」[雑誌論文3]では、マラルメとフロベールが熊という形象を自らの文学的営為と結びつけ、作品の中にどのように取り込んでいったのかを、単に熊を動物性に還元するのではなく、熊をめぐるイメージの歴史を踏まえながら論じた。

論文という形にはいまだならないが、無意識と死という問題から、マラルメの未完の断章「アナートルの墓」の読解を進めた。また2013年度のラシルド研究を土台として、ラシルドの作品の研究・翻訳を続けてきている。研究が進捗するにつれて、研究計画を設定した時点ではそれほど重視していなかった、無

意識と女性というジェンダーの問題が前面に出てきたように思われる。

2014年度

本研究計画を総括するものとして、マラルメの未完の作品『アナートルの墓』を分析した論文「マラルメの「喪の日記」? - 『アナートルの墓』分析」[雑誌論文1]を発表した。「書物」のプロジェクトの父子間の継承、喪の時間、父母による息子の死のとりえ方の違いという三つの視点から、マラルメの無意識を指す「自己」という概念が、先祖から子孫に伝わる遺伝的要素に特徴づけられているという、新しい論点を提示した。30000字を超えるこの論文は、今後、象徴主義の時代の他の詩人・作家・芸術家の「無意識」の概念を考察するうえでの基盤となる論文であると考えている。

また2013年度に引き続き、世紀末の知られざる女性作家ラシルドの読解・翻訳を進め、『自然を逸した者たち』の抄訳と「アンティノウスの死」の全訳を、『古典BL小説集』(笠間千浪編、平凡社ライブラリー)[図書1]に発表した(発行は2015年5月)。両方の作品とも男性の同性愛を描く、現代の視点から言えば「BL」の元祖とも言える作品であり、ラシルドを現代日本の文化現象の一潮流との関連から紹介する形となった。また、無意識をジェンダーや「自然」との関係から考察するための土台となる作品を、この機会に翻訳できたように思う。

論文という形にはいまだ至っていないが、文学とは別の枠組みで世紀末の時代を生き、無意識の表象を提示していた芸術運動や美術批評について、読解を進めた。これについては、本研究課題を引き継ぐ研究課題「美術批評から見たフランス象徴主義の言説の場の再編成」(若手研究(B)2015年-2018年)によって、成果を発表していく予定である。

最後に、本研究課題「マラルメと象徴主義を中心とする無意識の詩学の生成とその展開」について、マラルメの「無意識」とは結局のところ何であったのかを要約したい。マラルメは無意識を「自己 Soi」として、1870年代、とりわけ息子アナートルの死に際して書かれた『アナートルの墓』で概念として提示しているように思われる。

これまで研究代表者は、「自我 Moi」との対比で「自己 Soi」あるいは「無意識」が、1890年代冒頭の文壇で、自意識の閉域を破る概念として言及されていること、マラルメの場合はキリスト教的神 Dieu との対比で、人類の内に眠っている集団的魂として示されていること、こうした認識の淵源として、1866年4月28日付カザリス宛の虚無の発見を伝える手紙があった、同時代の生物学や観念論に影響あるいは触発されて、ルドンやラフォルグ、モーリス・バレスが「無意識の美学」を展開させていることについても明ら

かにしてきた。

本研究で明らかになったのは、「自己 Soi」の通時的側面である。「観念と結婚する」と題された構想メモの中に、「C'est moi + toi soi (それは私 + 君 自己)」という定式がある。このメモは男女の結びつきによって、「私」は個人性を奪われて、(共時的に)全人類に広がる集合的魂へと至ることを示すものとして理解されてきたが、『アナトールの墓』の読解によって、これを必ずしも男性と女性の結婚に限る必要がないことが分かった。「君 toi」と呼びかけられているのは、多くの場合、「息子 fils = 子供 enfant」である。「結婚 hymen 父と息子」というメモまで見られることを考えると、マラルメの「自己 soi」という概念には、子孫との相続、遺伝関係が含まれるのであり、世代を超えて伝えられていく遺伝形質、マラルメの言葉を借りれば「萌芽 germe」あるいは「精髓 génie」が問題となる、という仮説が立てられる。遺伝はもちろんダーウィンははじめとする同時代の生物学でさかんに議論された主題であるが、マラルメはそれを単に借用するのではなく、息子の死をきっかけにして、自らが先祖から遺伝形質を受け継ぐだけでなくそれを子に贈る存在であったことを強く実感し、「自己」という概念を自ら結晶化するに至ったと言えよう。

この観点から見ると、マラルメの他の詩(『賽の一振り』『エロディヤードの結婚』など)も、このような無意識の伝承のドラマと見ることができるだろう。またこの継承=結婚にまつわるジェンダー的意匠は、研究の進展とともに研究対象となった、女性作家ラシルドの同性愛やトランス・ジェンダーも含みこむような作品や、ジャリヤジャン・ロランといった作家の作品の分析にも適用可能である。またヴァレリーやジイドといった、マラルメの弟子筋に当たる作家が、マラルメの影響下にナルシスの主題を展開させながらも、マラルメのものとしてされた純粹意識の美学から、1890年代後期から離脱する動きを示していくのは、ある種、父マラルメからの継承のドラマからの距離として解釈することはできないだろうか。マラルメを中心とした師弟関係という問題は、この主題をめぐってフランスでシンポジウムが開かれたことがあるほど重要な問題であるが(トゥール大学、1995年)、こうした観点から再考することができる問題であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件。すべて査読無)

1. 熊谷謙介、「マラルメの「喪の日記」? - 『アナトールの墓』分析」、『人文研究』(神奈川大学)、184号、73-118頁

(2014/12)

2. 熊谷謙介、「BL小説の起源? —ラシルド『自然を外れた者たち』分析」、『人文研究』(神奈川大学)、181号、49-69頁(2013/12)
3. 熊谷謙介、「ダンシング・ベア、シャイニング・ベア—熊としての芸術家の肖像」、『ユリイカ』、2013年9月号、168-176頁(2013/8)
4. 熊谷謙介、「偶然と女—マラルメ『賽の一振り』分析」、『人文研究』(神奈川大学)、177号、1-29頁(2012/12)
5. 熊谷謙介、「マラルメの星座、ケージの星群」、『ユリイカ』、2012年11月号、182-188頁(2012/9)
6. 熊谷謙介、「自然が与えるモデルニテ - セザンヌとマラルメ」、『ユリイカ』、2012年4月号、174-181頁(2012/3)
7. 熊谷謙介、「ルドン、ラフォルグ、マラルメ—無意識の美学」、『人文研究』(神奈川大学)、174号、1-24頁(2011/9)

[学会発表](計 3件)

1. 熊谷謙介、「舞台上演と典礼の間で—マラルメによる「声」の祝祭」、第8回表象文化論学会、2013年6月29日、関西大学
2. 熊谷謙介、「エチュード、自然、静物 - セザンヌとマラルメ」、関西マラルメ研究会(招待講演)、2012年3月22日、京都大学
3. 熊谷謙介、「マラルメの「現代性」」、日仏若手セミナー(招待講演)、2011年7月10日、日仏会館

[図書](計 2件)

1. (翻訳)ラシルド、森茉莉ほか著、笠間千浪編、『古典BL小説集』、平凡社ライブラリー、2015年、355pp(ラシルドの二作品(『自然を逸する者たち』、「アンティノウスの死」)の翻訳を担当)
2. 笠間千浪、山口ヨシ子、熊谷謙介、小松原由理、前島志保、村井まや子、『悪女と良女の身体表象』、青弓社、2012年、270pp(以下一章分を担当「踊る女の両義性—ロイ・フラー『サロメ』を中心に」71-95頁(2012/3))

6 . 研究組織

(1)研究代表者

熊谷 謙介 (Kumagai Kensuke)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号：20583438

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし